

講談社

国枝史郎伝奇文庫(八)

任侠一刀流 上



国枝史郎伝奇文庫（八）

任俠二刀流（上）
にんきよう　とうりゆう

昭和五十一年五月二十日第一刷発行

著　者　国枝史郎

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―一二

郵便番号　一二二

電話　東京（〇三）九四五―一二二（大代表）

振替　東京三九三〇

印刷所　図書印刷株式会社

製本所　株式会社国宝社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

© Sue Kunieda 1976 Printed in Japan (X11)

横溝正史・半村良・尾崎秀樹



任俠二刀流
Ⅱ
上

講談社

任俠二刀流（上）

茜茶屋での不思議な口説

ここは両国広小路、隅田川に向いた茜茶屋あかねちやや、一人の武士と一人の女、何かヒソヒソ話している。

「悪いことは云わぬ、諸うんと云いな」

「さあね、どうも気が進まないよ」

「馬鹿な女だ、こんないい話を」

「あんまり話がうますぎるからさ」

「気味でも悪いと云うのかい」

「そうだねえ、その辺だよ」

「案外弱気なお前だな」

「恋にかかっちゃあこんなものさ」

「ふん、馬鹿な、おノロケか」

「悪かったら止すがいいよ」

「いやいや一旦云い出したからには、俺はテコでも動かない」

「妾も理由を聞かなければ、やっぱりテコでも動かないよ」

「いやそいつは云われない」

「では妾も不承知さ」

「そう云わずと諾ぐがいい。無理の頼みではない筈だ。好きな男を取り持とう。いわばこういう話じゃあないか」

「しかも金までくれるってね」

「うん、旅費として五十両、成功すれば礼をやる」

「だからさ本当におかしいじゃあないか、真面目に聞いちゃあられないよ」

「真面目に聞きな、嘘は云わぬ」

「そうさ嘘ではなさそうだね、だから一層気味が悪い。……ね、妾は思うのさ、これには底がありそうだね？」

「底もなけりゃあフタもないよ」

「馬鹿なことってありやあしない」

「ではいよいよ厭なのだな」

「そうだねえ、まず止めよう」

「よし、それでは覚悟がある」

「ホ、ホ、ホ、ホ、どうしようってのさ」

「秘密の一端を明かせたからには、そのままには差し置けぬ！」

「おやおや今度は嚇すのかい」

「嚇しではない、本当に斬る」

「何を云うんだい、伊集院さん、そんな強面こわおもに乗るような、お仙だと思っているのかい」

「いや本当に叩っ斬る！」

「恐こわいわねえ、オオ恐い、ブルブルこんなに顫ふるえているよ」

「ブッ、鎗棒べらぼう、笑っているくせに」

「それはそうと、ねえお前さん、ほんとにあの人木曾へ行くの？」

「うんそうだ、しかも明日」

「で、いつ頃帰るのさ？」

三人三様の旅の者

「で、いつ頃帰るのさ？」

こう訊いた女の声の中には、危惧と不安とがこもっていた。それを迂濶うっかり見遁みぬがすような、武士は不用意の人間ではない。

「さあいつ頃帰るかな」わざと焦じらすような口調をもって、

「ふふん、どうやら心配らしいな、教えてやろうか、え、お仙」

「ええどうぞね、お願いします」

「一年の後か二年の後、場合によっては永久帰らぬ」

「アラ本当、困ったわねえ」

「だからよ、おっかけて行くがいい」

「ナニ、みんな出鱈目だよ、そうさお前さんの云うことはね」

「それもよからう。そう思っていな、だがしかし明日から、彼奴の姿を見ることは出来まい」

「それじゃやっぱり本当なのね」

「クドい女だ、嘘は云わぬよ」

「それじゃあ妾考えよう」

「何も考えるにも及ぶまい、解った話だ、うんと云いな」

「そうだねえ、うんと云おう」

「おお承知か、それは偉い、それ五十両、旅用の金だ」

「薄っ気味の悪い旅用だねえ」

「何を馬鹿な蛇ではなし」

「およしなさいよ、蛇々と」

薩摩の藩士伊集院五郎と、両国広小路の蛇使い、お仙との奇怪な話から、この物語は開展する。

さてその翌日の払曉のこと、三人三様の人間が大江戸の地を発足し、甲州街道へ足を入れた。一人は立派な旅姿、紛れのない若武士で、小石川は水戸屋敷、そのお長屋から旅立った。もう一

人は堅氣の商人風、年は三十前後であろう、菅笠で顔を隠しているので、ハッキリ正体は解らないが、薩摩屋敷から出たところを見ると、伊集院五郎の変装らしい。

ところでもう一人の旅人は、全く異様な風采であった。紺の脛巾に紺の股引き、紺の腹掛けに紺の半被、紺の手甲に紺の手拭い、一切合切紺づくめ、腰に竹細工の魚籃を下げ、手に手鉤を持っている。草鞋の紐さえ紺である。頬かむりをしたその上へ、編笠まぶかに冠っているのも、その容貌は解らないが、赤い締め緒にくぐられた、クッキリと白い頤つきや、細々とした頸足へ、バラリもつれている紛髪や、手甲の先から洩れて見える、節麤のある指先や、そういうものから考えて見れば、若い女でなければならぬ。両国広小路の掛け小屋から、抜け出たところから想像すれば、蛇使いの女太夫、組紐のお仙が商売から、螭捕り姿に身をやつし、恋しい男を追っかけて木曾路へ行くに違いない。

「困ったわねえ、はぐれちゃった」

府中の宿まで来た時である、男の足には叶うべくもなく、後へ残された女螭捕りは、がっかりしたように呟くと、五月初旬の初夏の陽に、汗ばんだ額を拭こうとしてか、締め緒を解いて笠を脱いだ、剃りつけて細い一文字の眉、愛嬌こぼれる円味はないが、妖婦型さながらの切れ長の眼、ちょっと刺々しく思われるものの、それがバンプに似つかわしい、スッと高く長い鼻、その左右に麤があって、キュッと結べば深くなり、綻ばせれば浅くなる、そういう可愛い特徴を持った、小さい薄手の赤い唇、間違いはない、組紐のお仙。

甲州街道は日本一の難場、それを女の一人旅、これは困るのが当然である。

サツと斬り込んだ小野派流

いわゆる芸が身を助ける、案外お仙の道中は、平穩無事なものであった。

蝮を捕り捕り旅をした。蛇使いが本職である。お仙が一度口笛を吹くと、いろいろの長虫が寄って来た。それを手鉤で抄い上げ、ポンとびくの中へ抛り込む。と、蛇は穩しく、びくの中で眠ってしまう、蝮であろうとやまかがしであろうと、一度お仙の手にかかったら、その瘳猛な性質がにわかに穩しくなるのであった。

問屋場人足や雲助が、女と思って嘗めてかかると、お仙はびくから蝮を取り出し、これを振り廻して嚇しつけた。

可愛い可愛い蝮の子
陽やけて赤いやまかがし

蝮捕りの歌をうたいながら、小仏も越し、甲府も過ぎ、諏訪から木曾谷へ入り込んだ。

だがもちろんこの頃には、恋しい男も伊集院五郎も、とつくに木曾へはいったことであろう。福島宿、駿河屋という旅籠。

そこへはいって来た一人の武士、

「許せ、今晚厄介になる」

「へいへいこれはお早いお着きで……おいおい洗足を差し上げな。……松の一番だよ。ご案内

……」帳場の番頭お世辞を云う。

部屋へ通った若侍、年の頃は二十四五、背割羽織に裾縁野袴、柄袋をかけた、長目の大小、贅肉のないひきしまった体格、武道に勝れた証拠であろう、涼しいながらに鋭い眼、陽焼けて色こそ緒いけれど、高い鼻薄い唇、純な乙女にも鉄火な女にも、うち込まれそうな風采である。宿帳へ記した名を見れば、

江戸小石川、山影宗三郎。水戸屋敷から出た武士である。

夕餉を済ますと宿を出た。

「宿の景氣を眺めて来る」

「へえへえおいでなさいまし」

ここ木曾の福島宿は、山村甚兵衛の預かる所、福島関の存在地、いわゆる日本の裏門で、宵の口ではあつたけれど、江戸とは異い人通りも少く、聞こえるものは水ばかり、すなわち木曾川の流れである。

今日停車場のある辺り、その時代は八沢と云う。人家途絶えて木立ばかり、その木下闇へかかった時、声も掛けずに背後から、サッと切り込んだ者がある。

右肩から掛けて脇腹まで、大袈裟掛けのただ一刀！ 斬られてしまつては話にならない。

前へ飛ばず横へ逸れず、逆モーションという奴だ、アッという間に宗三郎、背後ざまに飛び込んだ。シュッと鞘走る刀の音、ズイと上段に振り冠る。構えは正しく円明流！

「莫迦！」とまずもって罵った。

「声も掛けず背後から、闇討ちするとは卑怯な奴、これ名を宣れ、身分を云え！ 本来ならば

こう云うところ、しかし俺はそうは云わぬ。と云うのは見当が付いてるからよ。……江戸を發つて甲州路、府中の宿へかかった頃から、後になつたり先になつたり、稀有の奴が附いて來た。やつした姿は商人風、縞の衣裳に半合羽、千草の股引き甲斐甲斐しく、両掛けかついで草鞋ばき、ひどく堅氣に見せながらも、争われぬは歩きぶり、足の爪先踏みしめ踏みしめ、踵で耐える武者運び、こいつ怪しいと眼を付ければ、寸の詰まつた道中差し、鎧に円味の加わつたは、ははあ小野派一刀流で、好んで用いる三叉作り！ ふふんこいつ贗物だな！ ビーンと胸へ響いたものよ。……どうやら俺を尾行らしい。はてないったい何んのためだ？ ちょっと不思議に思つたが、まず用心が肝心と、油断なくかかった小仏峠、コレ贗物、峠の茶屋で、よくも雲助をかたらつて、俺に喧嘩を売りおつたな！」

神を語る峠の老人

宗三郎威勢よく畳みかける。

「斬つて捨てるは易かつたが、大事な用事を抱えた身、何より堪忍が大切と、酒手を出して詫びを入れ、胸を擦つて山を下り、甲府お城下へ入り込んだら、憎い奴だ、コレ贗物、問屋場人足をけしかけて、二度目の喧嘩を売りおつたな、それも遁がれて福島入り、もうよかろうと思つたら、三度目馬鹿というやつだ、人頼みでは、峠が明かぬ、こう思つたか単身で、よくそれでも切り込んで來た、もうこうなつたらこつちのもの、俺の方で勘弁しない、人雜なしだ、一騎討ち、

出たところ勝負、さあ参れ！」

サッと切り下ろした片手斬り、流名で云えば払又刀、これが決まれば梨割りだ。不思議なことには手答えがない。敵はどうやら逃げたらしい。

「はてな？」と呟いた宗三郎、考え込まざるを得なかった。「浮世には素早い奴がある。俺の切り手をひっ外し、足音も立てずに逃げるとは？ いやどうも驚いたなあ」

チャリンと鑢音高く立て、刀を納めたものである。空を仰げば明日は天気、一点雲なき星月夜、と大きく拋物線を描き、青く光って飛ぶ物がある。人魂ではない流星だ。

「流星しばしば流るるは」

宗三郎微吟する。

「天下乱るるの兇徴なり」

よい声だ。澄き通る。悠然宿の方へ引っ返した。

享保十年夏五月、青葉薫ずる一夜の出来事、もって物語りの二段とする。

翌日宿を出た宗三郎、三岳村の方へ足を入れた。萩原の手前まで来た時である、ちょっと面白い事件が起った。

「篋棒な爺だ、何を云やあがる、村方の厄介になりながら、詰まらねえ事ばかり云やあがる。不吉も糸瓜もあるものか、こんな結構な事はねえ。第一人出入りが多くなり、村へ沢山金が落ちらあ」
「そうともそうともお前の言う通りだ。薬草採りの連中が、一日に使う金額だけで、村の一月の生活は立つ、もうそれだけでも有難えじゃあねえか」

「風儀が悪くなるのお山が荒れるのと、そんな愚にもつかぬ旧弊は、今日では通用しねえっても

のさ。金さえ落ちればよいじゃねえか」

「思っても見るがいい、俺らの村を、田もなけりゃあ畑もねえ、あるものと云えば、山ばかりだ。米も出来なけりゃあ野菜も出来ねえ、そこで年中炭を焼き、やっとな生活を立てていたのが、薬草採りが入り込んでからは、黄金の雨が降るようになった。そこでにわかに活気づき、人間にも元気が出たってものさ。それがいってえ何故悪い」

一人の老人を取り巻いて、五六人の若者が怒鳴っていた。

「まあ待ってくれお前達、そうガミガミ云うものではない。なるほど村方へ金は落ちる、こいつは決して悪くはない、悪いどころか有難いくらいだ。だから俺にも不平はない。ところがここに困ったことは、薬草採りという奴が、おおかた都会の人間でな、お山の靈験さを弁えていない。そこでお山中を駆け巡り、木を仆したり、土を掘ったり、荒らして荒らして荒らし廻る。そこでとうとう山の神様が、お憤りになったというものだ。で私におっしゃられた、薬草採りを追い払え！ でないと災難を下すぞよ」

七十を越した年格好、躍起となって爺は云った。

恩に掛けて手を引かせる

「山の神様が聞いて呆れらあ、お告げがあったもねえものだ。もしまたお前の云う通り、本当にお告げがあったのなら、そんな神様にゃア用はねえ。だって爺さん、そうじゃあねえか、俺らは

御岳の氏子だよ。それ神様というものは、氏子を守護るがお義務だ。ところが話は反対じゃあねえか。干乾しにしようって云うのだからな」

「都会から入り込んだ薬草採り、今山から行かれてみる、村方一円火の消えたように、ひっそり閑と寂れてしまふ。こっちからペコペコお辞儀をしてでも、いて貰えてえと思つてゐるのに、追つ払えとは途方もねえ」

「何んの神様のお告げなものか、狂人爺の寝言だあね」

「その寝言にも程がある、三岳の村方一統へ、迷惑を掛けようっていうんだからな。こいつ放置っちゃあ置かれねえ」

「みせしめのためだ、川へ流せ」

「谷の中へ抛り込め」

向こうみずの若者ども、老人を宙へ吊るそうとした。そこへ割り込んだのが宗三郎である。

「これこれ何んだ、乱暴な奴だ、やる事にも事を欠き、老人虐めとは何事だ！」叱るようにたしなめた。「いずれ仔細はあるだろうが、屈竟な若者が大勢で、一人の老人を手込めにしては、もうそれだけでいい訳は立たぬ。悪いことは云わぬ、堪忍してやれ」

今度は優しく扱った。

侍に出られては仕方がない、何か口小言を云いながらも、若者どもは立ち去った。

「どうだ老人、怪我はなかったかな」

「これは有難う存じました。へえへえ怪我はございません。いやはやどうも没分曉漢どもで、馬鹿な奴らでございますよ。せつかくこちらが親切づくに、いい事を教えてやったのに、恩を仇で